

まことに首尾一貫した論理であって、ウェーバーがカルヴァンの予定説について「思索によってえられた」と言い、そこに強みがあるとしたのはこの点である。

しかしながら、ウェーバーの説明が筋の通った見事なものであるということは、それがカルヴァンの予定説の解釈として適切であるということとは別のことである。もちろん、ウェーバーが目指すのは最初から、神学教理としての予定説の正確な叙述ではなく、彼が証明しようとしている問題に直接関係するかぎりの、つまり、あくまで「理念型」としての予定説、安藤氏のいわれる「予定説の意味像」⁷⁾を提示することであるから、それがカルヴァンの予定説そのままでないのは当然だともいえよう。しかしながら、そのことをふまえた上でなお、その「理念型」の概念構成はカルヴァンの「予定説の意味像」として適切なものであるかどうか問われなければならないだろう。

四

まず、先に(二)のところで引用したように、ウェーバーがカルヴィニズムの予定説を取り上げるにあたって、それを「恩恵による選び (Gnadenwahl) の教説」という表現で紹介していることに注目したい。予定説は本来「恩恵による選び」の教説であって、それは旧約聖書から新約聖書を貫く救済の中心をなす思想である。それがキリスト教の歴史のなかで受け継がれて予定説という形をとるが、それが本来恩恵的性格のものだということは、その代表的形成者であるアウグスティヌスの場合にもっとも典型的にあらわれている。彼は最晩年(428-429)に『聖徒の予定について』と『堅忍の賜物について』という予定説の問題を題名にした書物を著しているが、前者において30年以上も前の司教就任以前の時のことにふれて、「わたしは、恩恵の選びとはどういうものであるか、まだあまり注意深く探究していなかったし、まだ見出してもいなかった」⁸⁾と述べ、その状態から信仰自体が神の恩恵の賜物であるという発見にいたる経過について書いている。この発見がアウ

グスティヌスにおける恩恵論の確立という出来事であり、その成果が396年に著された『シンプリキアーヌスに宛てて——諸問題について』だとされているが、ここからもアウグスティヌスの経験において、予定説の成立が恩恵論の確立とひとつであったことがわかる。ウェーバーもこのことはよく知っていて、前に引用した箇所、アウグスティヌスからルターにいたる偉大な祈りの人の場合について、「救いの感情は、すべてが一つの客観的な力の働きにもとづくものであって、いささかも自己の価値によるのではない、という確固とした意識に結びついて現われている」(151頁)と述べて、予定説がこのような救いの体験から生まれたという認識を示しているのである。問題は、ウェーバーがこのような救いの体験と結びついた予定説のあり方と対比して、カルヴァンの予定説を「思索による」もう一つの道として対置したことである。たしかにキリスト教の歴史にあらわれた予定説はさまざまな形をとったが、それでも、予定が恩恵の選びであるという根本的意識は失われることはなかったと思われる。もちろん「体験によってえられた」と「思索によってえられた」という対比は、現実の歴史にはそのまま存在しない、特徴的な差異を浮かび上がらせるように構成されたイデアル・タイプには違いないが、そもそも予定説は、教理としてのみならず、個人の信仰としても、救いの体験から切り離しえないし、他方その体験はそれについての反省・思索を伴い、また聖書の教えについての思索からも切り離すことができないので、予定説についてのこのような対比は適切とは考えられない。

次に、カルヴァンは、被造物から無限に隔たった超越者、何物にも制約されない絶対者という神観念から出発して、その神の被造物にたいする絶対的決定として「神の選び(予定)」を考えたというウェーバーの解釈を検討しよう。たしかに、カルヴァンのいろいろなことばをコンテクストから切り離して取り上げるならば、こういう神観念を組み立てることも不可能ではないだろう。しかしながら、これほどカルヴァンの神観念と予定説から遠いものはない。カルヴァンが選びにおける神

7) 前掲書、286～294頁

8) *De Praedestinatione Sanctorum*, III, 7, *Oevres de Saint Augustin*, 24, Desclée, 1962, p. 480.